

全國年刊(月刊) 臺灣年刊各季刊(季刊)(月刊) 創刊於1951年(現由時報社出版)

春燈

6

2020 June



安住敦の句

墓は家族蜥蜴は間借揚羽は客

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

遊び心に満ちた一句「安住家の庭の生き物を擬人化した
つつその生態を的確に捉えている。」

この句が発表された頃の敦師は様々な役職を担い、大
変多忙な時期だった。充実した日々を過ごしていても
心身にかかる責任と重圧は相当なものであっただろう。
破調がそれを表している。柵や制約と無縁の生き物に「君
達は暢気で良いなあ」と語りかけているようだ。

矢口笑子

安住敦の句

豆めしや娘夫婦を客として

『午前午後』昭和四十七年

「ひとつ机に兄妹」と詠まれている娘が春に結婚して夫
婦で来るといふ。新所帯の生活にも少し慣れた頃であろ
う。丁度八百屋の店先には蚕豆が並び始めた。初夏のも
てなしには豆めしが一番である。梅雨も愉し娘夫婦はい
つも一緒とも詠んでいる。この言葉の中には嫁がせた
後の寂しき、愛しさや安堵など父親としての複雑な胸中
が察しられる。

持田信子

安立公彦

初蝶に青きみ空のありにけり

仰ぐ顔凛々しく揃ふ卒業子

いつ散りし杏の花や父の忌過ぐ

鞆の影の静けさ疫下の街

朝あさに見るつくづくし色清に



燈下集

○ 小島昭夫

花疲ればそぼそ語るジャン・ギャバン
やや傾ぐかしの文字や鼓草
男ひとり鯛焼きを食ぶ余寒かな
ウイルス禍谷崎荷風読む暮春
恨めしや句会中止の暮の春

○ 渡辺若菜

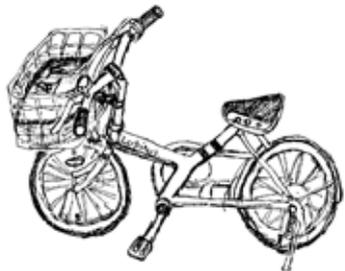
囀や生まれてすぐ立つキリンの子
鞆漕ぐ想ひの届く高さまで
初桜笑顔残して逝きし人
外出の当て無き日々や山笑ふ
花菜雨黄色い傘の通学路

○ 西岡啓子

鳥帰る日差しを返す草のゆれ
信号待つ問春の囊となりにけり
合はせゆく二人の歩み水草生ふ
囀や大樹しきりにきらめきて
巡り合ふ一書抱くや木の芽晴

○ 小山繁子

山裾の風やはらかし青き踏む
春光の霊峰富士を拝しけり
春の陽をのせて母子の滑り台
蝌蚪生る日差し動く池の面
柳絮とび水華やげる夕べかな



○ 中村紀美子

三月の彩のあふるる菓子舖かな
大師忌の鄙の御堂や白木蓮
ちちははの墓に辛夷のふりやます
むらさきの総の遠嶺や雁帰る
石浜の彼岸詣もかなはずに（龍雨師墓所永傳寺）

○ 浅木ノエ

花冷えや引けば躰の糸鳴いて
争はず生くる算段さくら餅
鏡拭いて春愁の顔のこりけり
うかれ猫一力茶屋の仄あかり
追伸のやうに降りくる春の雪（祝・追伸）

○ 懸林喜代次

雛僧の剃り合ふ頭山笑ふ
流觴や酒は伏見のをんな酒
花冷えや腕もげたる仁王像
遍路道色とりどりのスニーカー
春落葉この樹天然記念物

○ 豊谷ゆき江

ワンコインの学食ランチのどけしや
青木咲く誠実といふ宝物
お母さんへと書き出す手紙花の雨
運転免許の返納決むる夕ざくら
湯島聖堂囲ふ楷樹の若葉かな

○ 後藤眞由美

大仏の厚き御肩風光る
さへづりや重き心の解けゆく
胴吹き桜一輪光りけり
夢の襷こころの襷やスイートピー
音もなく桜隠しの消えゆけり

○ 川崎真樹子

模範囚のごと花の下歩みけり
花冷えや小さくなるほど手を洗ひ
花疲の薄桃色の頭痛かな
冷やかしがうかと一鉢植木市
オオカミの腹に石詰め春惜しむ

○ 木村梨花

きまぐれに旅のぶらんこゆらしけり
波音のひねもす届く花菜畑
堂裏につづく小道や竹の秋
風あれば風にしたがひ糸柳
福耳の羅漢が笑ふ日永かな

○ 河崎國代

この道に出合ひのあるや臈月
こし方の迷ひたる道鳥帰る
差し交はず枝の花々ふふみけり
刻紡ぐ力の緩ぶ花の昼
縄跳びの大波小波遅日かな

○ 溝越教子

少年の追ひかくる夢梅真白
一切を縋ひ交ぜにして雪解川
風出でて貝母の花の纏れ合ふ
紅梅や恋といふ文字忘れさう
夜の雨に思ひたちけり菊根分

○ 上野進

海女小屋に集ひし單車伊勢の海
磯桶に磯笛ひとつ陸人海女
息綱の夫を操る船人海女
石尊干す愛州の里の石畳
海女小屋の煙棚引く昼下り

○ 齋藤晴夫

陽光の煌めく川面初燕
音絶えて枝垂桜の圈に入る
釣舟の小波隠れ葎の角
懇ろに桜供へむウイルス禍
咲き満ちて鎮魂とも花の道

○ 石橋邦子

椿落つ沼への道のくらがりに
新宿門締めて花守塵を掃く
花ぐもり師の忌母の忌過ぎにけり
疫病の無き世を願ふ花の雨
妹の手づくりマスクとどく春

余言

安立公彦

亀鳴くや使はねばこゑ衰ふる

西川 保子

「亀鳴く」という春の季語は、「蚯蚓鳴く」という秋の季語と共に、想定の子語である。俳人はその想定の子葉を一句に入れて、想いを表現する。しかしそこには、句心を充分に咀嚼するという前提が大事なことは言う迄も無い。

この句、「亀鳴くや」という上五に、「使はねばこゑ衰ふる」という中七下五が、みごとに呼応している。声を、「こゑ」としたのも想いを深める。「こゑ」の衰えは、感性の衰えに通じる。然りげ無い表現も優れている。

明日は通夜大つぶの雪降り止まず

綱 徳女

風紋に一筋の艶鳥帰る

鷹崎由未子

春寒し聴きたき友の声遥か

江草 礼

「悼・和女様」の前書が付いている。去る三月十一日の深更、八十九歳で逝かれた高橋和女さんへの追悼句である。折から巷は、新型コロナウイルス疫病の渦中で、葬儀は内

輪で行われたと思われる。

和女さんは三年前、句集『風紋』を出版された。この題名の「風紋」は、和女さんの故郷鳥取の、「鳥取砂丘」に拠る。序文を書いたが、充実した立派な句集だった。掲出の三句、それぞれ和女さんへの思いが籠もっている。通夜を明日に控えて、窓外の春雪に見入る徳女さん。砂丘の表面に自ずと形作られた風紋に、一筋の艶を見出す由未子さん。もう一度聴きたかった和女さんの声が、遙か彼方に去ったと傷心の礼さん。亡き友への哀惜の思いが、三氏三様に詠まれている。惜しい作家だった。

点滴の音なく落つる遅日かな

木村 傘休

この「点滴」は日帰りか。病院のベッドに横たわり、点滴を受けていると、その滴下が、わが身を離れた動きのように感じられて来る。この分では快癒も遠くないと思う作者。「音なく落つる」は、透き通った表現である。「遅日かな」に思いが善く納まつている。

あたたかや本の中より笑ひ声

三宅 文子

やはらかき心はぐくむ春灯下

藤原 若菜

追伸のやうに降りくる春の雪

浅木 ノエ

西行忌大樹見上ぐるばかりなり

本多 遊方

「西行忌」は一九〇年（文治六年）二月一六日だが、一般には前日の涅槃の日、旧暦二月一五日を忌日とすると、歳時記は記す。それは、願はくば花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ 西行の和歌にちなんでのことという。この句、「大樹見上ぐるばかりなり」が善い。見上げる心こそ、成就への一步を成す。

恪勤の蝌蚪に七曜なかりけり

平野加代子

「恪勤の蝌蚪」は作者の造語だろう。しかし何となく分かる。お玉杓子を「蝌蚪」とし、更に「七曜」と続くと、「恪勤」が相応しく見えて来る。お玉杓子にとっては、恪勤こそ生命の基なのだ。勤め人のように「七曜」など論外という思いがしてくる。蝌蚪を善く見ている句だ。

初桜満願の日の百度石

清水 美子

「百度石」は近くの神社の境内にもある。神仏に祈願して、今日はその百度参りの満願の日。折から境内の大樹の桜がみごとに咲き始めた。「初桜」だ。願いは成就することだろう。こういう一途な、ひたむきな思いのこもる句に接すると、忘れ勝ちな感動が呼び戻される。

二月に刊行された『追伸』は、春燈編集長岩永はるみさんの第二句集である。題名は、あたたかや追伸ながき母の文から採ってある。ほのぼのとした思いの句だ。

掲出の三句。文子さんの「笑ひ声」は、集中、へ笑ふたび太る子どもや草の花、へ声たてて笑ふ赤子や柿の花、また「あとがき」にも、近くの保育園の散歩の途中、園児らの笑う場面がある。笑う子供の成長は快い。それは若菜さんの、「やはらかき心はぐくむ」にも通う。『追伸』を読むのは、「春灯下」こそ相応しい。その思いは、ノエさんの「春の雪」とて同じだ。「追伸のやうに降りくる」である。「母の文」にあるあたたかさ、全ての「子」の思いだ。「笑ひ声」、「春灯下」、「春の雪」善い納まりだ。

パレットに残る春色夫遠し

木多美美子

この「夫遠し」をどう解釈するか。中七に「残る春色」とあるので、夫君は逝去されているのだろう。「パレットに残る春色」は善い表現だ。そこにはチューブから搾り出した絵具を、パレットで調合する昔日の夫君が居る。

春の景物を描くための彩りの残るパレット。そこに在りし日の夫君の筆跡を辿り、今、改めて「夫遠し」と思う作者。この句により、私たちは俳句というものの、表現の深さを思うのだ。みごとに一句である。

〈春燈賞受賞作家・特別作品30句〉

花 明 り

近藤真啓

松過ぎてよりの望郷不倒翁
西方に里の峰々梅ふふむ
春風やはちみつ色の夢心地
ぶらんこの冷たく匂ふ雨後の園
風信子ひねもすラボに籠もりけり
南北へ揺らぐ前線つばくらめ
のどけしや天神池に亀溢れ
大脳に五十二の窓花明り
さや揺るるこでまりは雨恋ふる花
犬の眼に映るわが顔街若葉
薫風や背につばさの生ゆるかに
市境の道あふれくる祭笛

振花や手ぐしにて髮幣へる
フレームの撓む眼鏡や天道虫
心霊の抜けきるまでを泳ぎけり
雲の峰坂本龍馬倣ふべく
水影に秋のさきぶれ夕爾の忌
寝静まる木々にかなかな鳴きあたり
マー坊と呼ばれ見上ぐる天の川
透きとほる虫の楽章碓星
ヒトゲノム読み解く夜の秋思かな
どんぐりや一木に寄り立ち話
正門も通用門も夕もみぢ
白煙を立つるコルベン今朝の冬
背の高き生徒に小言息白し
百聞の文体ゆかし古炬燵
日曆は日毎に細りのつぺ汁
凧やどの灯も家を瞬かせ
だんだんと顔丸みゆく焚火かな
見渡せば人間ばかり鐘冴ゆる

当月集

安立 公彦選



○ 佐藤 玲子

体操カード真白インフルエンザ憎し
大マスク挨拶交はし振りかへる
春待つや通園服を着て脱いで
インフルエンザ昔遊びを教へけり
来年は伐らるる定めの桜かな(区立公園)

○ 室井津与志

○ 佐俣まさを

老菜のスマホに挑む春炬燵
花も芽も惑うてみたる令和かな

瘵血の庭一对の落椿(旧乃木邸)
ジャグリングの剣空を飛び初桜

天領の山並高く笑ひけり

山畑に鋤振る影や幣辛夷

畑打つや嬉々と戯る猿の群れ

城跡へ喘ぐ坂道山桜

菜の花や海に開閨岳凛と

滴せる柄杓の水や花御堂

○ 田中嘉信

○ 横山さくら

流れゆく雲の陰影春兆す

肩先に花びらふはり春の昼

梅林や花のあはひの遠見富士

春昼やいつの笑顔か古写真

黒々と老いたる幹や梅真白

しやぼん玉あと少しにて消えゆくや

下萌やみどり児眠る母の胸

春服の色を拾うて耳飾り

餌を欲る鳩の瞬き水温む

春の蚊に息をひそめて近付けり

春燈の句

安立 公彦選



藪の秀に春やはらかきひかりかな

千葉 木村秋草子

乙女笑むたび袴ぬぐすぎなの子

蔵並ぶ古き街道糸柳

岐阜 高井 修一

うららかや巻かぬ白菜花咲かす

半襟の白しなやかに花衣

岐阜 高井 修一

敷島の空の明るさ燕くる

風光るせせらぎに和す鳥の声

岐阜 高井 修一

歳月のねぢれを幹に梅かをる

もの芽や稚児の前歯の生え初むる

千葉 東木 洋子

ひたすらに切磋の九十路春来る

ウイルスに負けじと誇るさくらかな

千葉 東木 洋子

この世でもあの世でもなき春日和

コロナ禍の終息は聞おぼろ月

千葉 東木 洋子

コーヒーの香る夫の背涅槃西風

恋にはあらぬ胸の痛みや沈丁花

千葉 東木 洋子

春霞コロナウイルス何時止むや

老人に頼む手仕事諸葛菜

千葉 東木 洋子

校庭に姿なき子ら柳絮舞ふ

釈迦牟尼の頭に似たる露の臺

兵庫 片井 久子

春なのに湯宿寂しき湯の香り

若草に孔雀は羽をひろげぬる

兵庫 片井 久子

大名跡継いで釈台演ずや夏(六代目神田伯山)

福井 西本 花音

菜の花や昭和の唱歌口ずさむ

『住い読本』読む窓の辺のミモザかな

兵庫 片井 久子

花冷えの灯ともる路地の小料理店

道路工事ミモザ大樹のしばし揺れ

兵庫 片井 久子